

バッハ「マタイ受難曲」へのアプローチ

はじめに一本の新聞記事をご紹介します。掲載されたのは奇しくもハルモニーコールの「マタイ受難曲」初回の練習日でした。筆者は帰宅してこの記事に接し、いろいろなことを考えました。

「名もなき最期、そばに 東京・山谷のホスピス 身よりないひと、260人みとり」

「東京・山谷のドヤ(簡易宿泊所)街に、身寄りがない人たちのホスピスがある。シベリア抑留の経験者、大学の図書館の元司書、元ヤクザ……。社会からこぼれ落ちた入居者たちの人生は波瀾万丈だ。たどり着いた「終(つい)のすみか」で最後の安らぎをえて、生を全うしている。(中略)昨年11月に亡くなった男性(享年65)は、都内の私立大の図書館でかつて司書を務めていた。約30年前にアル中が原因で職を追われ、ホームレスに。末期の膵臓がんになり、昨年の夏に(ホスピス)「きぼうのいえ」にやって来た。クラシック音楽が好きで、特にモーツァルトとチャイコフスキーを愛した。部屋には印象派の絵を飾り、音楽鑑賞にふけった。『山谷に来て、こんな幸せな日々を送れるなんて信じられない』と語っていた。バッハの『マタイ受難曲』が流れる中、スタッフに見守られながら息を引き取ったという。」(朝日新聞 2016年5月14日 夕刊)

次は作曲家武満徹の最期の日々を回想した浅香夫人の言葉から。(聞き手は大原哲夫氏)

大原「それが18日のことでその前日17日の夜、東京にはめずらしく大雪が降ったんですね。」

武満「そうです。それで徹さんはたまたま NHKのFMで《マタイ受難曲》を全曲聴いたのです。とても不思議な気がしますね。もし私が行っていればラジオはつけなかったし、雪で私も初めて休んだ日だったし、見舞客ももうだれも面会に来ない。ラジオをつけたら《マタイ受難曲》をやっていた。外は雪がずうっと降っていて、一人、静かになりながら、大好きな《マタイ受難曲》を聴けたんですから。」(中略)

武満「雪の日ってなんかしーんとして静かですものね。19日に行ったとき、『昨日は《マタイ受難曲》を全部聴いたんだよ。いやぁバッハはすごいね。僕らは クリスマスじゃないんだけどなんだろう・・・』ってそれは静かなおだやかな表情でした。今まであまり考えないようにしていても、どこかで自分の病気の深刻さはもう、そのときはわかっていたと思います。私は想像するだけですが、《マタイ受難曲》を聴くことで、もう自然のままに安らかに大なるものに生命を委ねる心境になったのではないのでしょうか。きっと静かに旅立って行くための道しるべになったような気がしてなりません。私は何か深い恩寵のようなものを思わずにはおられませんでした。」(武満浅香『作曲家・武満徹との日々を語る』(小学館 2006年)より)

名もなきホームレスの男性と世界的な作曲家、対照的な生涯を送った二人の人間が、それぞれ最期の日々、臨終の床で聴いた音楽が期せずしてバッハの「マタイ受難曲」であり、音楽に包まれながら共々「自然のままに安らかに、大なるものに生命を委ねる心境になった」とすれば、この曲は聴き手の信仰の有無を問わず彼らに最後の安息をもたらす、まことにすぐれた音楽と言えます。

もう一人作曲家をご紹介します。現代音楽の第一線で活躍する権代敦彦氏、所属事務所の略歴によれば「1965年9月6日東京都生まれ。少年期にメシアンとバッハの音楽の強い影響のもとに作曲を始める。また、この頃欧米のキリスト教文化に触れ、高校卒業後にカトリックの洗礼を受ける。」とあります。人から聞いた話ですが、彼は一時期「マタイ受難曲」を毎日のように聴いて過ごしたそうです。

これほど聴き手の心をとらえて離さない音楽というのは、古今東西そうたくさんあるものではありません。しかしその内容のあまりの大きさ、深さ、厳しさから「マタイ」を敬して遠ざける人がいることもまた事実で、その良い例が音楽評論家の吉田秀和氏です。

同氏はその著書『指揮者について』（白水社 1975年）の中で「もしあらゆるヨーロッパの音楽家の中でただ一人をとるとしたら、私はJ・S・バッハをとるだろう。また、もし一曲をとれといわれたらバッハの『マタイ受難曲』をとるだろう。」と述べ、更に続けて「この曲はそれぐらいの内容をもっている。大バッハの手から生まれたといっても、これは一回限りの作品であり、音楽としての一つの大きな世界であり、また有史以来のヨーロッパのすべての歩みの根源につながる、大きくて深い意義をもつ対象と取り組んだ作品である。私の考えるのは、この音楽はバッハの作品であるとともにバッハ個人を超えた、もっと大きな音楽の流れの中の、一つの高まりだということでもある」と言っています。

そして10年後に著した『私の好きな曲』（新潮社 1985年）で吉田氏は「私は『マタイ受難曲』をこれまでほんの数回しかきいたことがない。レコードでもはじめから終わりまできいたのは何度あったか。数はおぼえてはいないが、十回とはならないのは確かである。私はそれで充分満足している。私は、こんなすごい曲は一生にそう何回もきかなくてもよい、と考えている。この曲は私を根こそぎゆさぶる」とも書いています。（吉田氏の文章中読点の省略は引用者=筆者の判断で行いました）

人生の終わりに臨み、自然に安らかな心で「マタイ受難曲」を受け容れる人、多感な少年時代にむさぼるように聞き続けた人、「こんなすごい曲は一生にそう何回もきかなくてもよい」と言う人、「マタイ受難曲」への向き合い方はまさに人それぞれという気がします。しかしこれをバッハの、そしてあらゆるヨーロッパ音楽の中で最高の作品、と言い切ってしまうのはいかがなものでしょう。それ故、一生に何度も聴く音楽ではない、としたらそれは構えすぎでもったいない話だと思います。筆者の体験によればこの音楽は数多く聴きこみ、歌い込むことでより深く味わうことができます。「マタイ受難曲は人類の至宝」と讃えることに反対を唱えるつもりはありませんが、何かとてつもなく大きな音楽と考える必要もないでしょう。それではもはや、我々未熟なアマチュアが手に負える作品ではなくなってしまいます。

私たちは「マタイ受難曲」にどうアプローチすれば良いのか、これはこの曲の受容のしかたと同じで、演奏に取り組む人各自がその人なりに考え、実践していけば良いのではないかと思います。

ドイツ語の発音に、テキストの解釈に、歌唱法に、作曲技法に、作品の構成に、演奏様式に、時代背景に、受容史に、「マタイ受難曲」の持つ多様なアスペクトを、それぞれの興味と関心の強さに応じて探求し、その結果からメンバー相互の情報交換が行われ、やがて共通の認識が生まれてくるなら、これこそ多くの人が集い、寄り添って初めて味わえる合唱の醍醐味と言うべきでしょう。

そうした活動にこの通信が少しでもお役に立てるよう、これから執筆を続けたいと思います。

最後にご案内をひとつ。昨年NHK-FMで放送された「おぎやはぎのクラシック放談 マタイ受難曲」の録音があります（mp3 ファイル）。おぎやはぎのツッコミに、音楽学者の礒山雅氏が演奏を交えながら答えるという内容で大変面白く、初めて「マタイ」に取り組む人にはとても参考になると思います。ご希望の方にはコピーを差し上げますのでお気軽にお申し出下さい。

【後記】 去る4月23日の総会で山田様と私が再び楽事委員を仰せつかり、前期から始めた「清水ヶ丘の風」も本号から発行を再開しました。引き続きご愛読をお願い申し上げます。 （新井）